

2014年12月第1回開催の

## “学生の制作する音楽録音作品コンテスト”について

日本オーディオ協会諮問委員 穴澤 健明

### 1. はじめに

2014年夏、音の日の新しいイベントに関する打ち合わせがあり、東京芸術大学の亀川教授他の先生方から学生の制作する音楽録音コンテストの開催が提案され、日本オーディオ協会ではその意向を受け入れて筆者が企画を担当した。その概要を以下に報告する。

学生が制作する音楽録音作品コンテストは、国内外の録音技術者教育・音響技術者教育と切っても切れない関係がある。日本オーディオ協会では、1991年にこの録音技術者教育・音響技術者教育の問題に取り組んできた。その成果は以下に見ることが出来る。(各編をクリックすると参照できます。尚、原本からのコピーの為、多少不鮮明な部分があります。ご容赦ください。)

- ・ JAS ジャーナル 1991年5月号：  
「世界の録音技術者・音響技術者教育」①、ドイツ編 Gerhard Betz
- ・ JAS ジャーナル 1991年5月号：  
「世界の録音技術者・音響技術者教育」②、アメリカ編 増本エリカ
- ・ JAS ジャーナル 1991年6月号：  
「世界の録音技術者・音響技術者教育」③、日本編 山海 僥太
- ・ JAS ジャーナル 1991年7月号：  
「世界の録音技術者・音響技術者教育」④、日本編② 菊田 敏雄

このような各国の教育について、日本オーディオ協会設立者の一人で音響工学の権威でもあった故伊藤毅早稲田大学名誉教授は、JAS ジャーナル 1991年7月号「トーンマイスターコースに想うこと～世界の録音技術者・音響技術者教育シリーズより～」の誌上で“芸術的にも高水準で技術的にも高品質の録音音楽を制作するための要員養成の重要性”を指摘した。

最近になって録音技術に関する周辺状況に大きな変化が訪れている。一昔前にはかなり大がかりな設備を要した「録音」は、最近の小型高性能のデジタル録音機器の普及発展により、専門の技術教育を受けていない学生や若者たちでも比較的容易に高音質の録音が実施できる。

その一方、音楽の内容や企画意図に留意しない録音も散見される。

このような状況に鑑み、日本オーディオ協会は、オーディオ文化を広め、健全な「音楽録音」と「再生音楽」の発展を期待し、学生の制作する音楽作品録音コンテストを実施した。

日本オーディオ協会では、1990年代半ばより、オーディオの普及推進を目指して各種のコンテストを実施した。その代表が、昨年21回を数えるまでに至った日本プロ音楽録音賞である。同じ頃に始まったアマチュアのための音楽録音賞も過去存在したが、残念ながら開始後数年を経て中止となった。

以上の経過を経て昨年「学生の制作する音楽作品録音コンテスト」が登場した。

## 2. 学生の制作する音楽録音作品コンテストの概要

本コンテストの応募用紙の最初に趣旨として以下の文が掲載されている。

「一般社団法人日本オーディオ協会では、我が国で音楽録音教育やオーディオ教育に関わる専門的教育機関が設立される以前より、音楽録音教育やオーディオ教育の重要性を認識し、その啓発に取り組んでいます。オーディオ文化を広め、楽しさと人間性にあふれた社会を創造するべく、健全な「音楽録音」と「再生音楽」の発展を強く期待するものです。」

本コンテストの募集要項と申込み用紙/録音制作企画書の概要を以下に示す。

### 募集要項

(1) コンテストの名称：“学生の制作する音楽録音作品コンテスト”

(2) 主催：一般社団法人日本オーディオ協会

共催：Audio Engineering Society 日本学生支部

協賛：ソニー株式会社、ティアック株式会社、株式会社ヤマハミュージックジャパン

協力：Audio Engineering Society 日本支部

(3) コンテスト概要

応募要項に示す形で応募された作品について、尚美学園大学 芸術情報学部 情報表現学科 千葉 精一 客員教授を審査委員長とする専門家からなる審査委員会にて厳格な審査を行い、2014年度「音の日」(12月5日(金)目黒雅叙園にて開催予定)にて優秀作品を発表し作者の努力を顕彰します。

(4) 応募資格：「音楽録音に興味を持つ学生の個人またはグループ」(高校以上の学生)

(5) 応募期間等

・受付開始日：2014年10月1日(木)

・応募締切日：2014年11月20日(金)必着

・応募作品制作期間：2013年1月1日以降制作のものとしします。

尚、この制作期間であれば、卒業制作作品等、在学中に作成された卒業生の作品も対象とします。

(6) 提出書類

① 応募申込み用紙

② 録音制作企画書

(7) 審査員構成

・ 審査委員長： 千葉 精一 尚美学園大学 芸術情報学部

・ 審査委員： 亀川 徹 東京芸術大学 音楽学部

長江 和哉 名古屋芸術大学 音楽学部

深田 晃 dream window inc.

中村 寛 Audio Engineering Society 日本支部

高松 重治 日本オーディオ協会

(8) 顕彰内容

・優秀作品(複数)を顕彰。(賞状と記念品を贈呈)

・シンポジウムへの参加、並びに“音の日のつどい”パーティー招待

### 応募申込用紙

- (1) 制作作品名
- (2) 代表者氏名/学校・所属団体名：
  - ・ グループ構成員氏名/学校・所属団体名
  - ・ 連絡先
- (3) 著作権処理：
  - ・ 著作権処理の必要性： 必要 / 不要
  - ・ 必要な許諾の入手先名：
  - ・ 許諾入手処理： 済 / 未処理
- (4) 提出物/提出予定日：
  - 録音制作企画書： \_\_\_\_月 \_\_\_\_日
  - 提出録音音源： \_\_\_\_月 \_\_\_\_日
    - CD-R ディスク
    - USB メモリー

### 録音制作企画書

- (1) 本作品の企画意図
- (2) 本作品の内容
- (3) 作品内容概要：
  - ・ 作曲（あるいは編曲）内容説明
  - ・ 演奏者（グループ）
- (4) 演奏編成およびマイクセッティング（楽器、設定、ポジション）
- (5) 録音会場：
  - ・ 会場名
  - ・ 広さ（ホールの場合客席数。スタジオ等の場合は凡その床面積、天井高など）
- (6) モニター環境：
  - ・ 使用録音機材一覧
- (7) ミキシング環境（録音後の編集やトラックダウンで使用了らした場合）
  - ・ モニター環境
  - ・ 使用機材など
- (8) 録音で意図し設定した音場の設定と音像定位設定の詳細
- (9) 当初の意図通りの成果が得られた点
- (10) 当初の意図が得られなかった点と今後の改善策
- (11) その他録音に対する特記事項など

### 3. 第1回“学生の制作する音楽録音作品コンテスト”の審査基準について

審査基準として以下を目安とすることとした。

(1) 企画制作力（含む録音制作企画書の完成度）：採点配分 20%

応募資料に書かれた録音制作企画書の内容を見つつ、企画意図が生きた作品になっているかを、作品を聴いて判断する。

(2) 作品の音楽性：採点配分 30%

応募作品を聴いてその音楽性（企画意図に沿った選曲かどうか及び演奏力）を判断する

(3) 録音技術力：採点配分 50%

音楽作品を録音するための基礎能力が備わっているかを、応募資料を見つつ作品を聴いて判断する。

以上の審査基準に従って以下の4作品を選出することとした。

■ 最優秀賞：1作品 音楽賞：1作品 企画賞：1作品 録音賞：1作品

尚、採点にあたっては応募者へのフォードバックの為のコメント・アドバイスも記入する。

### 4. 応募作品

全17作品の応募を得、17作品共に、そのどれもが制作時の制作者の楽しげな顔を思い浮かべることが出来る熱心な制作態度が感じられる作品であった。

多少予想を外れた点は、以下に示す作品のチャンネル数と制作者の学歴であった。

#### 4.1 全17応募作品のチャンネル数別応募作品数

- ・ 5.1 チャンネル 6作品件
- ・ 5.0 チャンネル 1作品
- ・ 4.1 チャンネル 1作品
- ・ 2 チャンネル 9作品

映画では普及しているものの、音楽ではほとんど普及していないサラウンド音楽作品が、応募作品のほぼ半数を占め、専門の学生の間では、サラウンドによる音楽表現を望んでいることが判明した。

#### 4.2 全17応募作品の制作者の学歴内訳

- ・ 専門の大学又は学科の大学院生の応募作品 8件
- ・ 専門の大学又は学科の学生の応募作品 6件
- ・ 専門学校生 2件
- ・ 一般（専門の学科ではない）大学の学生 1件

大変学歴が高いことに驚く。筆者が録音に関与した45年前には、大学院生が録音現場で働くなんてとんでもないと働く機会さえも与えられず、1年以上のアルバイト後にやっと録音現場に入れてもらえた日々を考えると正に今昔の感がある。

5. 第1回 学生の制作する音楽録音作品コンテスト受賞作品

① 最優秀賞：蒙 昕晨（モウ キンシン）さん 尚美学園大学大学院

作品名「惑星 2055」 5.1ch 44.1kHz/24bit

評価点：サラウンド処理は効果的で完成度は高く、サラウンド作品としての企画意図、プラン、考察がしっかりしており、音楽性もイメージに沿ったアレンジ構成、リズムカルさを失わず、うまくまとまっている、と好評価。また、全体のバランス感、サラウンド効果を有効に使用した録音技術も評価され、総合的に最優秀賞に値する作品

② 音楽賞：松永 麻耶（マツナガ マヤ）さん 名古屋芸術大学大学院

作品名「ReBirth」（自作曲） 5.1ch 44.1kHz/24bit

評価点：演奏のうまさ、中間部に「リバー素材」「無音」を取り入れた構成による作品として面白さ、また、楽器の編成も良く、高い音楽性が評価された。

③ 企画賞：鈴木 勝貴（スズキ カツキ）さん 東京芸術大学

作品名「祭り～3つのジャポニスムより～」サラウンド録音 5.0ch 96kHz/24bit

評価点：演奏は素晴らしく、表現力に富み、祭りのテーマ性は良く表現できており、企画意図を実現するためのしっかりしたプランニングは評価に値する

④ 録音賞：笹川 景太（ササガワ ケイタ）さん 日本工学院専門学校

作品名「Kiss Me」 2ch 44.1kHz/16bit

評価点：作品は安定したバンドサウンドで演奏は良かった。また、ギター、ドラムスの音量がよく、音も良い、バランスはとてもよい、と演奏と共に録音技術が高く評価された。

6. 表彰式とパネルディスカッション（「音の日」関連イベントとして開催）

表彰式は東京 目黒 雅叙園を会場に平成 26 年 12 月 5 日開催の「音の日」のイベントの中で行われ、その後、表彰者と審査員によるパネルディスカッションが行われた。

パネルディスカッションでは、全受賞作品の制作者と全審査員が壇上に並び、各受賞作品の制作者が応募作品の概要と苦労した点などを報告した後、約 3 分間作品を流した。その後審査員からコメントをいただき、ディスカッションに入った。一方通行ではなく審査委員からのコメントも含めたディスカッションを聞くことが出来たのが収穫であったとの意見が受賞者ばかりでなく多数の来場者より聞かれた。全審査委員、全受賞者、そして来場者の多くから、本コンテストの来年の継続実施を要望された。

7. おわりに

誰もが比較的容易に高音質の録音が出来た時代であるからこそ、録音そのものよりも、制作企画書の出来が大きく作品の質を左右する状況にある。プロでもなかなかまとめた制作企画書を書けない今日、学生にその訓練の機会を与えることができたことは大きな収穫であった。

前に 1 列に並んだ学芸会的なつまらない優等生的な作品を目指すのではなく、独創的な作品を意図した制作企画書、録音計画書を作成し、そしてその企画書その計画書に沿った質の良い作品の登場を切に希望する。



授賞式の様子



パネルディスカッションでの審査員席



受賞者